

AIの時代の健康観の行方

研究科長 落合洋文

健康の問題を考える際は、一人ひとりの心身のありかたとともに、生活が営まれている土地の風土や経済の状態なども考慮しなくてはならない。水俣病や四日市ぜんそくが健康の社会的決定要因の負の事例であるとすれば、地中海食で知られる南イタリアや戦前の沖縄はプラスの事例といえるであろう。健康は生物学的な問題であると同時に社会的な問題でもあるのだ。ということは、健康の問題を論じるには歴史的な見通しも必要ということである。

現代人の健康についていえば、SNSや生成AIの存在は無視できない。1990年代後半から加速度的に進展した情報化は、現代人の健康にどのような影響を及ぼしつつあるか。子供の脳の発達に対するスマートフォンやSNSの害が社会的な関心事になり、規制を求める声や法整備の動きも出てきているが、こうしたテクノロジーが健康にどのような影響を及ぼすかは歴史的にも興味深い問題である。

どのようなテクノロジーも何らかの実際的な必要性から生み出されるが、テクノロジーに対する人間の本質的な反応として、ひとはこれを自分から切り離して見、それゆえにいと簡単にその魅力の虜になってしまう。美少年ナルシスが池の水面に映った自身の姿にみとれてしまったように、マクルーハンがテクノロジー一般を人間の拡張ととらえ、これをメディアと呼んだ。そして早くも1964年に『メディア論』のなかで、メディアのもつこのような魔力を「ナルキッソスの陶酔」と呼んだ。SNSの虜になったデジタル・ネイティブの若者たちはナルシスの生まれ変わりだろうか。

日本でインターネットが普及しはじめたのは1990年代の最後の3年間であった。情報や情報化はバブル崩壊後の日本経済を救う打ち出の小槌だった。しかし情報の意味や価値が議論されることはほとんどなく、そうした議論を欠いた情報化がどこへ向かうかという疑問や不安が公の場で議論されることはほとんどなかった。筆者は『情報化社会の虚像・実像』（ナカニシヤ出版、1997）で、そのような情報化が向かう先は社会のフラグメント化であろうと大胆な予測を行ったが、今日さまざまな形の分断に揺れる世界を目の当たりにすると、複雑な思いを禁じえない。

いままた、私たちは生成AIが人間の意識と融合しはじめる歴史的瞬間に立ち会っている。身体性を欠いた汎意識とでもいうべきこのテクノロジーは、インターネット上のありとあらゆるリソースを取り込んで成長を続けている。有用性などという言葉では言い表せないほどの力と可能性を示しており、すでに社会全体が「ナルキッソスの陶酔」に浸りつつある。これはテクノロジーに対する反応の常だから驚くことではないが、ここでまたテクノロジーの意味や価値について考えることを怠ると、特に人間の幸福という観点から吟味することを怠ると、その結果は人間存在の根幹にかかわるものになるかもしれない。神は百年前にニーチェによって死を宣告されたが、その神は生成AIとして復活することになるのだろうか。

人間が自己を律する柱は身体をもつ存在としての可能性と限界の意識であり、死生観であると思う。物理的な場を占める生身の存在として有限の時間を生きることが、一人ひとりの個性を育み、また同胞に対する共感を可能にする。

少し違う視点から見てみよう。ハイデッガーは人間を「世界内存在」という言葉で表現した。人間は世界のなかに産まれ落ち、世界を内在化することで成長する。たとえていえば、一人ひとりの人間は池の表面に生じる波紋のようなものである。いくつもの波紋が重なって世界ができる。そう考えれば、一人ひとりの個性の違いなどわずかなものといえるかもしれない。しかし私たちの目に、そのわずかな違いが運命的な意味や重みをもって映るのである。（話のついでに言えば、自分の心のなかを掘り下げても本当の自分が見つからないのは、自我や自己意識が表面的な現象だからである。）

マルクス・ガブリエルではないが、人間は脳ではない。有限の身体をもち、一人ひとりが個性的な存在である。しかもその一人ひとりが世界内存在としてお互いに多くを共有することで成り立っている。健康もそのようにして成り立つものであろう。AIの時代がどのような健康観を育むのか、歴史的な観点から注意深く観察し、研究科として議論を深めたい。